様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　９ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００７７０

研究課題名（和文）「被災地」陸前高田の場所再構築と地理学―感情・身体・ジェンダーと風土の視点から

研究課題名（英文）Reconstructing Places in Rikuzentakata, a Tsunami hit area of the Great East Japan Disaster: Highlighting a Geography of Emotion, Body, Gender and Fudo (milieu)

研究代表者
熊谷　圭知（Kumagai, Keichi）

お茶の水女子大学・　　・名誉教授

研究者番号：８０１５３３４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「復興」という開発過程に、被災地の人々の心情、風景、場所や風土の再構築といった、可視化・定量化されない要素を、どのように組み込んでいくかについての論である。中心市街地の嵩上げ工事は住民にとって「第二の喪失」ともいえるものだったが、一方で映像やテキスト、語りを通じて、様々な場所が表象され再構築されていた。新たに作り出された場所は、被災前の場所の記憶を継承しながら、その連続性の上に存在している。復興における「場所」とは、「被災前の市街地／嵩上げ後の市街地」という二項対立で捉えられるものではなく、「今、ここ」でその都度作り出され、常に構成の過程にある開かれたものであることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究が明らかにしたのは、以下の点である。1）津波被災地陸前高田の人々が、元の街が失われ、嵩上げして作られた新たな市街地に「場所喪失」の不安定感を抱いている；2）ハード偏重の国や市による「大文字の復興」の一方で、住民やコミュニティによる多様な「小文字の復興」が接合されている；3）住民の場所の経験は多様であり、官主導の伝承施設や震災遺構に収束されない記憶をどのように表象し伝承していくかが課題である。

研究成果の概要（英文）：This study highlights how primordial landscape, emotions of the people at the tsunami hit area should be fairly included in the development process of “reconstruction” which tend to carry weight visible and quantitative aspects, for the sake of humanistic reconstruction of place and fudo (milieu). Newly constructed urban areas by heightening after the tsunami disaster gave “the second lost” for the people who lost familiar landscapes together with the living memory. These newly built townships and places, however, are also imaginatively constructing succeeding memories of places of pre-disaster area.

研究分野：人文地理学

キーワード：被災地　陸前高田市　場所　風土　感情　身体　ジェンダー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．　研究開始当初の背景

本研究が対象とする被災地**陸前高田市では、12.5 メートルの防潮堤が建設され、津波で壊滅した広大な中心市街地の領域を 10 数メートル嵩上げして、新たな商業施設等を作るという、類例のない大規模な公共工事が行なわれた。防災集団移転の住宅地は山を削り、森を伐採して高台に作られ、地域の風景・風土は大きく相貌を変えている。**

２．　研究の目的

被災地で進められる「復興」という名の再開発は、物質的・可視的側面に偏る傾向がある。本研究は、「復興」という開発過程に、被災地の人々の心情、風景、場所や風土の再構築といった、可視化・定量化されない要素を、どのように組み込んでいくかについての試論である。このため、「場所」の再構築を軸に、感情・身体・ジェンダー・風土などの議論に精通したメンバーを分担者に組み入れた。

３．　研究の方法

研究方法の中核をなすのは、現地の住民との対話的なフィールドワークであり、現地住民の方々を単なる研究対象ではなく、研究協力者として位置づけ、双方向的・継続的なインタビューを実施してきた。Covid-19 の蔓延のため、感染者の少なかった同地を訪ねることを控えざるを得ない時期もあったが、分担者はそれぞれ努力して、調査を続けてきた。

４．　研究成果

（1）各研究メンバーの探求テーマと成果の概要は、以下のとおりである。

1)熊谷圭知（お茶の水女子大学名誉教授）：被災地における原風景の喪失と風土の復興

「原風景」とは、「個人の心に深く刻み込まれ、繰り返しあるいは時折、強い情感を伴って喚起される風景」である。2019 年 12 月～2 月にかけて、これまで関わってきた陸前高田市の人々に原風景調査を行なった。その結果、人々の原風景として多く挙がってきたのは、1)子供時代の生業・遊びとそれにまつわる自然、2）祭りの風景、3）高田松原の風景、そして 4）震災前後の街の風景であった。震災前後を対象とした街の風景の対照を語った回答が多く寄せられたことは、陸前高田の人々が、元の街が失われ、その上に新たに作られた市街地に対し、「場所喪失」の不安定感を抱いていることを窺わせる。一方、津波の最高到達点に桜を植える「桜ライン 311」や、高田松原を復原しようとする「高田松原を守る会」など、新たな風土を再構築しようとする活動も、外部からの若い世代も巻き込みながら行なわれている。

2)吉田容子(奈良女子大学教授)：被災地への若者移住と復興まちづくり

多くの自治体が都市部出身者の地方移住を支援し、地方移住者による地域振興への寄与が期待されている。被災地陸前高田において、復興・まちづくりの新たな担い手として期待される移住者の実践について、陸前高田市が運営委託する特定営利活動法人高田暮舎の活動と移住者への聞き取りから考察した。震災後の U ターン者である同団体の主宰者には、昔の保守的な陸前高田に戻ってほしくないために、外部の人と関わることで新しい高田の価値観を作りたいというモチベーションがあった。被災地のことを分かっている U ターン

者が地元の復興を図る一方、Ｉターン移住者は復興まちづくりに関わる実践を通して、自分の「場所」を構築し、自分が居心地のよいと感じるところで暮らす魅力を見出していた。

3)中島弘二（金沢大学教授）：陸前高田における場所の喪失と再構築

被災地において人々は、被災前から被災時、そして被災後の復興というプロセスを通じて日々刻々と移り変わるそれぞれの場所と向き合って生きてきた。そうした場所の意義を考慮することなしに復興の問題を論じることはできない。こうした問題意識から、1）復興過程における住まいの変遷と「場所」、2）土地区画整理事業における様々な「場所」に焦点を当て考察を行なった。中心市街地の嵩上げ工事は住民にとって「第二の喪失」ともいえるものだったが、一方で映像やテキスト、語りを通じて、様々な場所が表象され再構築されていた。嵩上げ事業が作り出した場所は、被災前の場所や破壊され更地となった場所の記憶を継承しながら、その連続性の上に存在している。復興における「場所」とは、「被災前の市街地／嵩上げ後の市街地」という二項対立で捉えられるものではなく、「今、ここ」においてその都度作り出され、常に構成の過程にある開かれたものである。

4)大城直樹（明治大学教授）：被災地陸前高田における「民俗の場所」

資料調査等から、少なくとも陸前高田中心市街地の「民俗」が都市であるが故なのか、周辺地域に多くの「民俗」的なものが豊富にあるのに対して、それほど多くないことを実感した。七夕がその中にあって最大のものということになろうが。街の民俗については、近隣の大船渡や気仙沼などと比較する必要があろう。ムラとマチの関係性について、改めて陸前高田の地域性に留意しながら検討する必要があると感じた。「民俗」の場所の現在というテーマで、引き続き、嵩上げ地を含めた「民俗地図」的なものを作成したい。具体的には、小祠・小堂、各種モニュメント等の再現（移転）状況の確認、また、これら（年中行事を含む）を維持させる主体ないしは社会的基盤（青年団・消防団）の確認を行いたい。さらに可能であれば、郷土史家的な方から話を伺う機会を得たいと考えている。

5)池口明子（横浜国立大学教授）：「コモンズ」としての広田の海

広田半島沿岸海域の資源利用と社会集団の変化を村落やライフヒストリー、漁業史資料で遡った。広田半島において、採貝・採藻慣行は広く実践されており、これらの自給的採集者は准組合員として漁協組織に加入している。また、採集漁場は小字スケールではなく旧広田村全域が入会漁場となっており、このことが広田半島沿岸の海域を範疇とする漁場管理を可能にする下地となっている。親類同士の贈与の慣習は継続しており、氏神祭祀もこの親類単位でおこなわれている。家の財産として森林は重要な位置を占め、木材は家屋材や薪炭のみならず磯船製造にも用いられた。黒崎神社の例大祭には地区単位に異なる演目で参加があり、なかでも梯子虎舞は旧広田村を象徴する演目である。広田地区の住民の多くは黒崎神社の氏子であると同時に、慈恩寺の檀家組織を構成しており、広田地区単位のまとまりの良さに大きく貢献していると考えられる。

6)村田陽平（法政大学准教授）：こころの復興とその課題

陸前高田では、「はまってけらいん、かだってけらいん（仲間に入って語りましょう）」な

どのキャンペーンを中心に、「みんなで輝く陸前高田（ノーマライゼーションという言葉のいらない街づくり）」を目指す被災者の心のケアを実施している。メンタルヘルスの問題は、非常に繊細なものであるため心のケアを求める当事者と接点を持つことは難しい。そこで、主に陸前高田市ユニバーサル就労支援センターでの聞き取りをすることで、この課題に取り組んだ。このセンターの支援対象者は、働きたくても働けない、なかなか仕事が決まらない人（市近隣域在住者）である。話をする中で、ひとりの利用者（PTSD 当事者）への聞き取りを実施することができた。また、他の NPO 団体（匿名）でも、二人の PTSD 当事者の語りを聞くことができた。これらを通じて、震災被災地の心のケアは、今なお進行形で取り組まなければならない課題であることを確認した。

7)倉光ミナ子（お茶の水女子大学准教授）：外国人女性からみた「陸前高田」の復興

陸前高田生まれではない人たちの「陸前高田」の復興に対する思いを明らかにすることを主たる目的とした。研究対象者は、陸前高田周辺に婚姻を通して暮らすようになった女性たちであり、県外出身の女性と外国人女性の双方を含むが、特に後者に重点を置いた。

2023 年 2 月の最終報告会では、在日外国人の女性たちから聞いた場所とその思い出をまとめ、報告した。その結果、女性たちがそれぞれ陸前高田に思い出の場所をもっていることが分かった。それはストレスを解消するために子供や他の外国人家族とともに集まった場所であったり、津波で亡くなってしまった病院の医師と最後に会った場所であったりした。こうした場所の多くは津波で失われてしまったが、さらに彼女たちは、高田松原の復興のための松を植える作業にボランティアとしてかかわることなどを通じて、新しい思い出の場所をポジティブに構築しようとしていた。

8)関村オリエ（東京女子大学教授）：陸前高田の公営住宅と入居者の新しいつながり

陸前高田に被災後新たに作られた災害公営住宅が、入居した人たちにどのような経験や関係性をもたらしたのかを探求した。陸前高田では、2011 年 5 月に仮設住宅への入居が始まり、災害公営住宅が最初に作られたのは、2014 年 10 月のことである。調査対象とした W 地区の公営住宅では、2017 年に入居がはじまり、60 世帯が居住している。単身高齢者世帯の比率も高い。災害公営住宅は「既存コミュニティや新たなコミュニティ形成に配慮し、立地、場所、規模、配置を検討」し、「入居者相互や地域住民との交流場として、オープンスペースや店舗スペースの確保に配慮」して作られたが、既存の集落や共同体、地区の分断、匿名性の高さや、孤立、特に男性の閉じこもりという問題も指摘されている。住民への聞き取りからは、女性がお茶っこの会など、積極的な集まりの機会を作っているの対し、男性の活動は 2 か月に 1 回程度の飲み会はあるものの、それ程活発ではないことが窺えた。

9) 小田隆史（東京大学准教授）：震災伝承と災害遺構 ――記憶の場所における葛藤

災害の記憶・教訓を伝え継ぐ「場所」の意味や「機能」への問いを探求した。その中では、東日本大震災の〈伝承〉、遺構の保全と活用を個人的経験をふまえて論じた。記憶の場所には葛藤が存在する。災害経験の教訓化・規範化は、個人に外在する社会的・文化的なものである。被災者の中にもアンビバレントな感情がある。悲惨な体験を思い出したくないという

感情と「せめて」教訓として生かしてほしいという感情である。その結果、取捨選択が行なわれ、捨象される記憶・経験が生まれることになる。筆者自身が関わったものを含む、東日本大震災の被災地における震災遺構を例に挙げながら、公的な伝承施設を、官主導の「場所」の消費に終わらせずに、当事者・関係者との対話の積み重ねを通じて、防災教育・啓発に活用し、「他人事」「遠い昔の歴史」にしないための実践が重要であると論じた。

10)杉江あい（京都大学講師）：中心市街地の復興と場所の再構築

高田町の嵩上げ地における中心市街地の復興は、中小機構、UR、ゼネコン、市役所に加え、地元の金融機関や商業者同士の顔の見えるつながりによって進められた。なかでも市役所と商工会、中心市街地での本設店舗再建を目指す事業主は結びつきが強く、一堂に会してまちづくりの計画を立てていた。この動きに対し、仮設店舗に留まった事業主、被災していない事業主、新規参入の事業主、事業主以外の住民などの他の主体は、積極的ないしは周辺的参加、傍観、反対など多様な立場を取っていた。新しい中心地市街地では、震災前のまちを重ね合わせるような実践が様々に見られた一方で、震災前と大きく変化したまちを自らの「ふるさと」と思えなくなってしまったという声も聞かれた。なお、同様に大規模な嵩上げが行われた気仙町の状況は高田町とは異なっており、今後検討していく必要がある。

11)久島桃代（名古屋大学助教）：「被災地」陸前高田における記憶の継承活動と創出される「場所」　震災の伝承活動に取り組む住民は、その記憶とともに現在の陸前高田を生きることを選んだ人たちといえる。そうした人たちが創造する「いま」「ここ」の時間―場所とはいかなるものなのか。報告者は震災後に防災の目的で出現した桜ライン、ハナミズキの道といった景観を「場所」の観点からとらえ、そこに込められた住民たちの心情、活動に参加する地元住民、外部からのボランティア、樹木の三者の出会いによって想起される記憶の内容を聞き取ってきた。これらのライン（道）は、訪問者にとっては「見る」以上の役割を持たない「景観」かもしれないが、主催者にとっては震災に対する悔しさや死者への思い、未来への願いが込められた「場所」である。また、桜ラインの活動では、植樹のボランティア活動自体が記憶伝承の場であり、植樹スポットが特別な場所へと変化していた。二つの活動の中で紡がれる記憶、生み出される場所とは、過去と未来との往還から生まれるものであり、そこに流れる時間は、「時間との競争」ともいえた行政主導型の復興とは大きく異なる速度を持つことが明らかとなった。

（2）研究成果とその還元

2023 年 2 月 19 日には、陸前高田市コミュニティホールにおいて、現地の研究協力者 4 名を加えた最終報告会を開催することができた。報告者は 18 名（オンライン参加を含む）であり、延べ 40 名近い聴衆が参加した。この報告会には地元住民も多く参加し、地元新聞（岩手日報、東海新報）にも報道されて、現地社会への最初の還元も行なうことができた。今後は、研究成果を今年中に学会等の場で発信することを予定している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 熊谷　圭知	４．巻 49-4
２．論文標題 陸前高田の原風景と風土の復興	５．発行年 2020年
３．雑誌名 環境と公害	６．最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 熊谷圭知	４．巻 64-4
２．論文標題 「南洋」の新しい地誌を描くために	５．発行年 2019年
３．雑誌名 地理	６．最初と最後の頁 82-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 熊谷圭知	４．巻 929
２．論文標題 ブーゲンビルはなぜ独立をめざすのか――住民投票の歴史的背景	５．発行年 2020年
３．雑誌名 世界	６．最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大城直樹	４．巻 201906
２．論文標題 ポストモダン地理学とは何であったのか？	５．発行年 2019年
３．雑誌名 １０＋１（テンプラスワン）ウェブサイト	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Koji Nakashima	4．巻 12
2．論文標題 The development of resident movements of Ryukyu Arc during the 1970s and 1980s: The rise of new regional identities and aspirations for independence	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Materiality, People's Experience and Making Geographical Knowledge; Japanese Contributions to the History of Geographical Thought. (ed. by Fukuda, Tamami)	6．最初と最後の頁 43-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sugie, A.	4．巻 10-9
2．論文標題 Solidarity economy versus neoliberalism?: Microcredit in rural Bangladesh	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of Business and Economics	6．最初と最後の頁 811-824
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15341/jbe(2155-7950)/09.10.2019/002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 久島桃代	4．巻 92-4
2．論文標題 農山村に移住する女性たちの経験と場所感覚――福島県昭和村「織姫」を事例として	5．発行年 2019年
3．雑誌名 地理学評論	6．最初と最後の頁 224-240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 久島桃代	4．巻 15
2．論文標題 農山村女性移住者と自然との関わりにみるライフストーリー：昭和村における「織姫」と「からむし」との関わりから	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6．最初と最後の頁 109-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小田隆史ほか	4．巻 54
2．論文標題 震災遺構を活用した探求型防災学習の実践支援――仙台市若林区荒浜地区の「いのち」と「くらし」の学びに焦点を当てて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宮城教育大学紀要	6．最初と最後の頁 449-458
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関村オリエ	4．巻 71-3
2．論文標題 学界展望：社会地理	5．発行年 2019年
3．雑誌名 人文地理	6．最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関村オリエ	4．巻 42
2．論文標題 地域のリストラクチャリングと住民「参加」――大阪豊中市の地域自治活動を事例に	5．発行年 2019年
3．雑誌名 群馬県立女子大学紀要	6．最初と最後の頁 131-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoko Yoshida	4．巻 －
2．論文標題 Gender Geography in Japan: the Trajectory, Fruits of Research and Future Challenges	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Gender, Place & Culture： A Journal of Feminist Geography	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/0966369X.2018.1552929	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 熊谷圭知・新井佑里	4．巻 57
2．論文標題 ベトナム難民の定住過程と多文化共生の課題――群馬県伊勢崎市・前橋市でのフィールドワークから	5．発行年 2018年
3．雑誌名 お茶の水地理	6．最初と最後の頁 10-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 熊谷　圭知	4．巻 63（10）
2．論文標題 日本統治がパラオにもたらしたもの―二人の女性の語りから	5．発行年 2018年
3．雑誌名 地理	6．最初と最後の頁 86-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 熊谷　圭知	4．巻 64(4)
2．論文標題 「南洋」の新しい地誌を描くために	5．発行年 2019年
3．雑誌名 地理	6．最初と最後の頁 82-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池口　明子	4．巻 64（2）
2．論文標題 高瀬貝とツキガイ：南洋の沿岸資源管理とパラオ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 地理	6．最初と最後の頁 74-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sugie, A.	4．巻 5(2)
2．論文標題 Disembedding Islamic locale: the spread and deepening of Islamic knowledge in rural Bangladesh	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Journal of Urban and Regional Studies on Contemporary India	6．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小田　隆史	4．巻 66（2）
2．論文標題 身近な地域の理解を通じた防災/地球規模課題としての災害 ： 高校「地理総合」への期待	5．発行年 2018年
3．雑誌名 新地理	6．最初と最後の頁 92-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 倉光　ミナ子	4．巻 15
2．論文標題 サモアにおける「ジェンダーと開発」：その歴史的変遷と特徴.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 人文科学研究	6．最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関村　オリエ	4．巻 40
2．論文標題 ライフストーリーとまちの記憶についての一考察－「織物のまち」桐生に暮らす住民の事例から－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 群馬県立女子大学紀要	6．最初と最後の頁 131-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 久島　桃代	4．巻 92（4）
2．論文標題 農山村に移住する女性たちの経験と場所感覚―福島県昭和村「織姫」を事例として	5．発行年 2019年
3．雑誌名 地理学評論	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計19件（うち招待講演　5件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 熊谷圭知
2．発表標題 「被災地」の復興と場所・風土の再構築――2011～18年、陸前高田でのフィールドワークからの試論
3．学会等名 国際開発学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 熊谷圭知
2．発表標題 フィールドワークする、場所をつくる――パプアニューギニアと陸前高田を繋ぐもの
3．学会等名 人文地理学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 熊谷圭知
2．発表標題 場所論からの〈男性性と身体〉再考――パプアニューギニア、ブラックウォーターの瘢痕文身儀礼の参与観察から
3．学会等名 日本地理学会
4．発表年 2019年

１．発表者名 熊谷圭知
２．発表標題 パプアニューギニアの「場所」の物語
３．学会等名 金沢大学シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田容子
２．発表標題 都市空間における身体と権力
３．学会等名 人文地理学会（特別発表）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中島弘二
２．発表標題 日出生台をめぐる軍事化と地域社会
３．学会等名 日本社会学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koji　Nakashima
２．発表標題 The development of resident movements of Ryukyu Arc during the 1970s and 1980s: The rise of new regional identities and aspirations for independence
３．学会等名 East Asian Regional Conference in Alternative Geography（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sugie, A. and Khan, S.
２．発表標題 Changes and persistence of women's roles in rural Bangladesh
３．学会等名 人口学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 杉江あい・海津正倫
２．発表標題 バングラデシュ、ロヒンギャ難民キャンプ地帯における水源とその利用
３．学会等名 日本地理学会（ポスター発表）
４．発表年 2019年

１．発表者名 関村オリエ
２．発表標題 地域活動に参加する父親たちについての一考察――男性性に着目して
３．学会等名 人文地理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nakashima, Koji
２．発表標題 Struggle for life: Okinawan activist Seishin Asato’s environmentalism.
３．学会等名 nternational Geographical Union 2018 Regional Conference (Quebec City).（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 池口　明子
２．発表標題 湿地漁業の文化生態：熱帯アジアとカリブ海の事例から.
３．学会等名 人文地理学会（特別発表）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ikeguchi, Akiko
２．発表標題 Adaptive governance of coastal fisheries resources in response to Isoyake (seaweed deforestation): a case study in Ojika island, Japan
３．学会等名 3rd World Small-Scale Fisheries Congress, Chiang Mai, Thailand（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 池口　明子
２．発表標題 小規模金採掘地域における漁民の生態知と環境ガバナンス：フィリピン・ビコール地方の湾域を事例として
３．学会等名 地域漁業学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sugie, A
２．発表標題 Do Islamic norms impede inclusive development of women?: a case study of Islamic education for women in rural Bangladesh.
３．学会等名 10th INDAS-South Asia International Conference, Tokyo University of Foreign Studies.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yoshida, Yoko
２．発表標題 Occupation forces and prostitution in Japan after World War II
３．学会等名 The 2018 IGU Regional Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Oda, Takashi
２．発表標題 Panel Discussion “Education, Capacity Development and Disaster Resilience
３．学会等名 nternational Symposium on Disaster Resilience and Sustainable Development（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Oshiro, Naoki
２．発表標題 Two Olympics and urban redevelopmrnt: 56 years in Tokyo,
３．学会等名 IGU 2018 Quebec Regional Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kushima, Momoyo
２．発表標題 Embodied memories and places: Female migrant narratives about karamushi in Showamura, Fukushima prefecture
３．学会等名 The 2018 IGU Regional Conference (Quebec convention center)（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

1．著者名 Kuramitsu, Minako	4．発行年 2019年
2．出版社 Demeter Press	5．総ページ数 239
3．書名 Johnson, J.K. and Johnston, K eds. Maternal Geographies: Mothering in and out of Place	

1．著者名 杉江あい	4．発行年 2019年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 336
3．書名 日下部　尚徳、石川　和雅編　『ロヒンギャ問題とは何か』	

1．著者名 杉江あい	4．発行年 2020年
2．出版社 古今書院	5．総ページ数 188
3．書名 澤柿　教伸、野中　健一、椎野　若菜編　『フィールドワークの安全対策』（FENICS　100万人のフィールドワーカーシリーズ9）	

1．著者名 熊谷 圭知	4．発行年 2019年
2．出版社 九州大学出版会	5．総ページ数 560
3．書名 パプアニューギニアの「場所」の物語――動態地誌とフィールドワーク	

１．著者名 Sugie, A.	４．発行年 2019年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 119
３．書名 Deconstructing financial inclusion and exclusion in development discourse: case studies of microfinance operations in rural Bangladesh. In Leimgruber, W. and Chang, C. D. eds., Perspectives on geographical marginality Volume 4: Rural areas between regional needs and global challenges	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大城　直樹 (Oshiro Naoki) (00274407)	明治大学・文学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	倉光　ミナ子 (Kuramitsu Minako) (10361817)	お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授 (12611)	
研究分担者	村田　陽平 (Murata Yohei) (10461021)	近畿大学・文芸学部・准教授 (34419)	
研究分担者	杉江　あい (Sugie Ai) (10786023)	京都大学・文学部・講師 (14301)	
研究分担者	池口　明子 (Ikeguchi Akiko) (20387905)	横浜国立大学・教育学部・准教授 (12701)	

6．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小田　隆史 (Oda Takashi) (60628551)	東京大学・総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	吉田　容子 (Yoshida Yoko) (70265198)	奈良女子大学・人文科学系・教授 (14602)	
研究分担者	関村　オリエ (Sekimura Orie) (70572478)	東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652)	
研究分担者	久島　桃代 (Kushima Momoyo) (80792506)	名古屋大学・環境学研究科・助教 (13901)	
研究分担者	中島　弘二 (Nakashima Koji) (90217703)	金沢大学・人間科学系・教授 (13301)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関